



TITLE:

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍

AUTHOR(S):

森, 博行

CITATION:

森, 博行. 朱敦儒の詞にあらわれた邵雍. 中國文學報 2011, 80: 25-47

ISSUE DATE:

2011-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/201529>

RIGHT:

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍

森 博 行

大阪大谷大學

一 序 文

欽宗の靖康二年（一一二七）、亡國の悲哀をつぶさに體驗することになる朱敦儒（一〇八一―一一五九）は、北宋が滅亡する以前の四十數年間、彼の生地である洛陽において、隱逸の生活を樂しんでいた。『宋史』卷四百四十五「文苑七 朱敦儒」に次のように記されている。

朱敦儒、字希眞、河南人。父勃、紹聖諫官。敦儒志行高潔、雖爲布衣、而有朝野之望。靖康中、召至京師、將處以學官。敦儒辭曰、麋鹿之性、自樂閒曠、爵祿非所願也。固辭還山。（朱敦儒、字は希眞、河南（洛陽）の人。父の勃は、紹聖（一一〇九四―九八）の諫官なり。敦儒は

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍（森）

志行高潔、布衣爲りと雖も、而れども朝野の望あり。靖康（一一二六―二七）中、召されて京師（汴京）に至り、將に處するに學官（大學の教官）を以つてせんとす。敦儒辭して曰わく、麋鹿の性、自ら閒曠を樂しみ、爵祿は願うところにあらざるなり、と。固辭して山に還る。）

「麋鹿の性、自ら閒曠を樂しみ、爵祿は願うところにあらざるなり」、粗野な天性、廣々と靜かな世界を樂しみ、爵位や俸祿は願わず。^①このように隱逸の人として生きることを願っていた朱敦儒は、「詞俊」と呼ばれる詞の名手でもあった。次に引用する文は、宋・樓鑰「朱巖壑の鶴賦及び閭丘使君を送る詩に跋す」（『攻媿集』卷七十一）の一節である（巖壑は朱敦儒の號）。

承平時、洛中有八俊。陳簡齋詩俊、巖壑詞俊、富季申文俊、皆一時奇才也。（承平（太平、北宋のこと）の時、洛中に八俊あり。陳簡齋（陳與義）は詩俊、巖壑（朱敦儒）は詞俊、富季申（富直柔。富弼の曾孫）は文俊、皆な一時の奇才なり。）

現今、南渡詞人と呼ばれる詞人群の一人として位置づけ

られる朱敦儒^②の詞は、「在蘇軾之後・辛棄疾之前這一時期、朱敦儒在詞壇的影響是很大的」(蘇軾の後・辛棄疾の前の時期において、朱敦儒の詞壇における影響は、たいへん大きいものであった)と説明されることがある。けれども、朱敦儒の詞は、蘇軾や辛棄疾の詞とはいわば格が違い、かれらの文學的醍醐味に及ばない、というところが、客觀的に妥當な評價であらう。

朱敦儒の詞をいかに評價するかはともかくとして、彼の作品は現在、『樵歌』と題する詞集に二百四十數首傳わっており、沙靈娜 注釋『樵歌注』(貴州人民出版社 一九八五年二月)、朱德才 主編『增訂注釋 全宋詞 第一卷』所收(文化藝術出版社 一九九七年二月)、鄧子勉 校注『樵歌』、洪永鏗 編著『朱敦儒集』などによって、親しみやすいものになつてゐる。特に『樵歌注』は、(檢討の餘地がないわけではないけれども)制作年代を推定し、大きく「早期詞作 南渡前(一一二六年)」、「中期詞作 南渡至致仕前(一一二七—一一四五年)」、「晚期詞作(一一四六—一一五九年)」(中期と晩期は、更に二期に細分されている)とし

て、三期(細分すれば五期)に分類して編集されているので、朱敦儒の八十年に近い生涯と照らし合わせながら讀むことができ、まことに都合がよい。

ところで朱敦儒の特徴は、文學的には蘇軾の詞を繼承し、思想的には禪や道教の影響をうけているところにかがわれるようであるが、『樵歌注』を通讀して、興味ある事實に氣づいた。『樵歌注』(『增訂注釋 全宋詞 第一卷』、『樵歌』、『朱敦儒集』も同じ)にはその片影すら見られないけれども、朱敦儒の幾首かの作品に邵雍(一〇一一—一〇七七)の影が見え隠れしていると思われるのである。そこで朱敦儒の「鷓鴣天 西都の作」(『樵歌注』一三頁。以下、頁數は『樵歌注』のそれをさす)を取りあげて、邵雍と朱敦儒との關係という、從來ほとんど看過されてきた視點から朱敦儒の詞や人物を考えてみることにした。「鷓鴣天 西都の作」を取りあげるのは、この作品は朱敦儒の「最も人口に膾炙」(宋・周必大『二老堂詩話』「朱希真出處」)した作品といわれ、彼の前半生を象徴的にしめす、もつとも代表的な作品であるからである。なお、邵雍の詩は、四部叢刊初編所收の

『伊川擊壤集』によるが、他の作品については煩雑を避けるために、底本を明示しない場合がある。

二 「鷓鴣天 西都の作」と邵雍

「鷓鴣天 西都の作」は、次のとおりである。

我是清都山水郎 我れは是れ清都の山水郎

天教嬾慢帶疏狂 天は嬾慢として疏狂を帶びしむ

曾批給露支風敕 曾て露を給し風を支する敕を批し

累奏留雲借月章 累ねて雲を留め月を借るる章を奏

せり

(以上、前関)

詩萬首

詩は萬首

酒千觴

酒は千觴

幾曾着眼看侯王 幾ぞ曾て着眼して侯王を看ん

玉樓金闕慵歸去 玉樓 金闕 歸り去るに慵く

且插梅花醉洛陽 且く梅花しばを插して洛陽に醉わん

(以上、後関)

副題の「西都」は洛陽(副題を『中興以來絶妙詞選』は、

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍(森)

「自述」に作る。前関第1句の「清都」は天界の都、したがって後関第4句の「玉樓金闕」は天界の宮城。前後するが、後関第3句の「幾曾」は「何嘗」におなじ。興味深いのは、前関第1句の「山水郎」である。この言葉は、朱敦儒の獨創なのか、あるいは模倣なのか、これまで明快に説明したもの、筆者は寡聞にして知らない。もともと、次のような事が考えられる。朱敦儒「水龍吟 感事」(六三頁)に「雲屯水府」(雲は水府に屯す)という句があり、「水府」は星の名で、「水を主る官」(『晉書』「天文志上」)である。そして天界にこのような官職があるところからヒントを得て考えた、と。しかし、「山水郎」はしばらくおく。面白いのは、「曾て露を給し風を支する敕を批し、累ねて雲を留め月を借るる章を奏せり」という奇妙な表現だ。この句を見たとき、たちどころに邵雍の連作詩「首尾吟三百五十首」(『伊川擊壤集』卷二十)の「その四十九」が連想された。次のような作品である。

堯夫非是愛吟詩 堯夫は是れ詩を吟ずるを愛するに

非ず

詩是堯夫會計時 詩は是れ堯夫 會計する時

進退雲山爲主判 雲山を進退して主判爲り

陶鎔水竹是兼司 水竹を陶鎔するは是れ兼司なり

鶯花舊管三千首 鶯花 舊と管す 三千首

風月初收二百題 風月 初めて收む 二百題

歲暮又須行考課 歲暮には又た須く考課を行うべし

堯夫非是愛吟詩 堯夫は是れ詩を吟ずるを愛するに

非ず

第2句の「會計」は、役人が行う歳末の總決算。第5句

の「管」は管理、第6句の「收」は收納。もとからある

「鶯」や「花」をうたった詩三千首を管理し、あらたに

「風」や「月」をうたった詩二百題を收納した。第7句の

「考課」は、役人に對する勤務評定。右の詩において特に

注目すべきは、第3・4句である。「主判」は、官廳にお

ける一つの部局の責任者。隱者の道を選んだ邵雍にとって、

『雲山を進退（昇格させたり降下させたり）して、『水竹を

陶鎔（育成）する』ことが、おのれの仕事^⑥。『雲山』『水

竹』、それに「鶯花」「風月」などの自然の鑑賞や、それら

を素材にした作詩を役人の仕事に比擬したわけである。こ

のような奇想天外な着想は、科擧の試験を受けて役人にな

ることが、いわば義務づけられていた時代において、現實

には隱者の生活を送っている人物にしてはじめて思いつく

ものであつて、おそらく邵雍の獨創によるものである。

邵雍も青年時代には、役人になるために科擧の勉強をし、

受験をした。しかし、夢は實現しなかった。餘談ながら、

右のような着想を生んだ深層心理には、詞の巨匠・柳永が

科擧試験に落ちたとき、「鶴冲天」をつくり、「才子詞人は、

自ずからはれ白衣の卿相」（『樂章集』）とうたって反應した

心性に、一脈相通じるものがあるであらう。ここで朱敦儒

の「山水郎」。天界で「露を給し風を支する敕を批し」（露

を供給し、風を支給する詔敕の是非を判斷し、「雲を留め月を

借るる章を奏せり」（雲を引き止め、月を借用する文章を奏上

する）仕事、要するに天界において「露」「風」「雲」

「月」などの自然に對する管理を職掌とする「山水郎」は、

先ほど引用した奇抜な着想にもとづいて文學的に形象化さ

れた邵雍の「雲山を進退して主判爲り、水竹を陶鎔するは

是れ兼司なり」にヒントを得て生まれた言葉ではあるまいか。「主判」「兼司」に對して、「批敕」（制敕を批判すること）「奏章」というふうに表示に違いはあるけれども、邵雍が自任する役職も、自然を管理する「山水郎」に他ならないからである。

次に、前関第2句の「嬾慢帶」。邵雍の詩にこの表現はない。しかし、この三字を『中興以來絶妙詞選』（卷一）など「分付與」につくる文獻がある。（天がおのれに）「分付與」という表現は、唐・施肩吾に「天遣春風領春色、不教分付與愁人」（天は春風をして春色を領せしむるに、分付して愁人に與えしめず。「下第春遊」『全唐詩』卷四百九十四）とわたわれているように、邵雍の獨創ではない。けれども、彼の「洛陽春吟・その一」（卷十九）

四方景好無如洛 四方の景好 洛に如くは無く
一歲花奇莫若春 一歲の花奇 春に若くは莫し
景好花奇精妙處 景好く 花奇しき 精妙の處
又能分付與閑人 又能く分付して閑人に與う
や、「安樂窩中吟・その十二」（卷十）の最後の一聯

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍（森）

造花功夫精妙處 造花の功夫 精妙の處

都宜分付與閑人 都て宜しく分付して閑人に與うべし

など、邵雍獨特のきわめて印象的な表現がみられる。また「疏狂」という言葉は、白居易の詩句（「疏狂は年少に屬し、閑散は官卑の爲なり」「代書詩一百韻、寄微之」「白氏長慶集」卷十三）にみられるものであるけれども、邵雍「共城十吟・その九・春郊の舊酒」に「未だ是れ疏狂の極ならざるに、其れ困頓を如何せん」（『集外詩』）とわたわれている。「天は分付して疏狂を與えしむ」（天はわたくしに自由奔放の性分を分け與えてくれる）という表現には、邵雍の作品との意識的な關わりがあるのではないか。

第三に、後関の「詩は萬首、酒は千觴」。邵雍の詩にこれと同一の表現はないが、次のようにうたわれている。

殊無紀律詩千首 殊に紀律無し 詩千首
富有雲山酒一瓢 富みて雲山有り 酒一瓢
〔趙充道祕丞に贈らるるに和す〕卷十六
〔書事吟〕卷十六

陶鎔情性詩千首 情性を陶鎔す 詩千首

燮理筋骸酒一盃 筋骸を燮理す 酒一盃

さらに「林下局事吟」(卷九)、つまり隱者世界における官廳の仕事の歌と題する詩のごときは、次のような作品である。

閑人亦也有官守 閑人も亦た也[※]た官守有り

官守一身四事有 官守 一身に四事有り

一事承曉露看花 一事は曉露を承けて花を見る

一事迎晚風觀柳 一事は晚風を迎えて柳を觀る

一事對皓月吟詩 一事は皓月に對して詩を吟ず

一事留佳賓飲酒 一事は佳賓を留めて酒を飲む

從事于茲二十年 茲こに從事して二十年

欲求同列誰能否 同列を求めんと欲するも 誰か能くするや否や

第3・4・5・6句における「一事」という表現にみられる散文的なくり返し、および二・三・二という一般の詩には見られない破格のリズム(五言詩に更に二文字を加えたと解釋すべきなのであろうか)、このような表現形式の作品を

詩と呼んでいいものかどうか、いささか戸惑いを感じるが、隱者にも「看花」や「觀柳」とともに、「吟詩」と「飲酒」の「官守」(役目)があるという表現は、すでに引用した「雲山を進退して主判爲り、水竹を陶鎔するは是れ兼司なり」に通じる邵雍得意の着想によつて生まれたものであり、自然とともに詩と酒は、邵雍の生活における必需品であつた。

なお、「官守」は、『孟子』「公孫丑下」の一文「官守ある者、その職を得ざれば則ち去る」(趙岐によれば、人臣として官に居り、その職を守るを得ざれば、當に致仕して去るべし)にもとづく言葉。邵雍はそれを反用して、自分は「その職」をきちんと守っているゆえに隱者をやめる必要はない、しかるに「同列」、隱者の職責を果たしている同役は一人もいない、だから眞に隱者と呼ぶにふさわしい人物はおのれだけ、といった。邵雍は、嘉祐六年(一〇六一、五十一歳)と熙寧二年(一〇六九、五十九歳)の二度、遺逸として朝廷に推舉されたが、どちらも官に就かず、最終的に拒絶した。隱者の生涯を貫いたことは、彼の自慢の一つで

あつた。ちなみに右の詩は、熙寧五年（一〇七二、六十二歳）の作。

第四に、「幾ぞ曾て着眼して侯王を看ん」。この一句は、

邵雍「後園即事三首・その一」（卷五）

太平身老復何憂 太平に身は老い復た何をか憂えん

景愛家園自在遊 家園を景愛し 自在に遊ぶ

幾樹綠楊陰乍合 幾樹の綠楊 陰りて乍ち合し

數聲幽鳥語方休 數聲の幽鳥 語りて方に休む

竹侵舊徑高低迸 竹は舊徑を侵して 高低に迸り

水滿春渠左右流 水は春渠に滿ちて 左右に流る

借問主人何似樂 借問す 主人は何似なる樂しみぞ

答云殊不異封侯 答えて云う 殊に封侯に異ならず

の「借問す 主人は何似なる樂しみぞ、答えて云う 殊に

封侯に異ならず」や、「洛川に遊ばんとして、初めて厚載

門を出づ」（卷三）の最後の一聯

民間有此樂 民間に此の樂しみ有り

何必待封侯 何ぞ必ずしも封侯を待たん

などにしめされる、隱者の「樂しみ」を「封侯」（朱詞の

「侯王」、押韻の關係でこのように表現した）と同次元においた邵雍の人生觀や處世術を連想させる。

最後に、「且く梅花を插して洛陽に醉わん」。この句の

「梅花を插」すは、邵雍以前の作品に見出しがたい。『樵

歌』（二三八頁）は、朱敦儒「水調歌頭 淮陰の作」の一句

「不管插花歸去」に對する【箋注】の文（二二頁）「宋代の

民間に插花の風俗があり、その盛況は歐陽修の『洛陽牡丹

記』に『洛陽の俗、大抵花を好む。春時、城中貴賤となく、

畢く花を插し、擔を負える者と雖もまた然り。』とみえる。

朱敦儒は洛陽に生まれ、南渡の前は主にそこで生活してい

たので、これはすなわち往事を追述した」を指摘する。け

れども、邵雍「諸友と共に城南の張園にて梅を賞す十首・

その五」（卷十三）に次のようにうたわれている。

梅臺賞罷意如何 梅臺 賞し罷んで 意は如何

歸插梅花登小車 歸るに梅花を插して小車に登る

陌上行人應見笑 陌上の行人に應に笑わるべし

風情不薄是堯夫 風情 薄からず 是れ堯夫と

「梅臺」は梅を觀賞するために設けられた高臺。邵雍の

友人の司馬光に「史誠之の張明叔が梅臺三種の梅花を送らるるに謝すに和す」および「君貺の張氏が梅臺に宴すに和す」(ともに『溫國文正司馬公文集』卷十三)と題する詩があり、邵詩の「城南の張園」の「梅臺」が、司馬光の「張明叔が梅臺」と同一の建物であるならば、「張園」は張明叔(本名張景昱)^⑦の庭園である。「小車」は邵雍が日常的に愛用した乗り物。「且く梅花を挿して洛陽に酔わん」、洛陽の陽春に浮かれて、酔いにまかせて頭上に梅花を挿す人は、朱敦儒のみならず、「風情」の粹人・邵雍でもあった。朱敦儒の醉眼には、頭上に梅の花を挿すおのれの姿の上に、

邵雍の姿が二重に映っていたのではあるまいか。ただ、邵雍の詩的世界を詞によって翻案し、そしておのれはもとと天界の役人、しばらく地上に降り立った隱逸の人、と設定したところが、朱敦儒の新機軸である。といえば、謫仙人・李白が連想される。『樵歌注』は「説明」(二四頁)において、「『天子呼び來たれども上船せず、自ら臣は是れ酒中の仙と稱す』李白と同調と稱するに堪ゆ」と述べる^⑧。もっとも、「侯王」をなみするという點で、李白と邵雍に

は共通する人生態度がある。邵雍にあこがれる朱敦儒が、李白におのれの姿を重ね合わせていたとしても、不思議なことではない。

なお、二點補足しておく。

その一。『樵歌注』(二四頁)は、この詞を「召されて京師に至り、將に處するに學官を以つてせんとす。敦儒辭す、という體驗と結びつけて解釋する。胡雲翼『宋詞選』

(二〇九頁。中華書局 一九六二年八月)も、「この詞は多分、

汴京から洛陽にもどった後につくられた」とする。また

『樵歌』(一三七頁)は、【箋注】「一」において、「本篇は宋徽宗の宣和(一一一九―一二五)の末、洛陽において作られたのだろう。詞意を考えるに、官を辭して歸隱した後であろう。朱氏は宣和年間に出仕したことがあり、五年の長きに達した」云々と説明している。朱敦儒は北宋時代に仕出したことがあるというのが、『樵歌』の著者・鄧子勉氏の見解である。いずれにしてもこれらの説に従えば、「玉樓金闕」は現實の宮城を暗示する。しかし、くり返しになるが、ユニークな「山水郎」は、邵雍の作品に靈感を

得て生まれた言葉、というのが卑見である。^⑨

その二。邵雍は千五百餘首の詩を傳えている。この多數の詩のうち、南宋末の謝枋得（一二三六―八九）の編纂とされる『千家詩』^⑩（詩人數一百二十四名、詩數二百二十三首）には、わずか一首の詩が採録されているにすぎない。それは「插花吟」と題する七言律詩で、次のような作品である（原載は『擊壤集』卷十）。

頭上花枝照酒卮 頭上の花枝 酒卮に照る

酒卮中有好花枝 酒卮の中に好き花枝有り

身經兩世太平日 身は經 兩世 太平の日

眼見四朝全盛時 眼は見る 四朝 全盛の時

況復筋骸粗康健 況や復た筋骸は粗ば康健にして

那堪時節更芳菲 那堪^{かね}て 時節 更に芳菲なるをや

酒涵花影紅光溜 酒は花影を涵して 紅光溜る

爭忍花前不醉歸 爭か忍んで花前に醉わずに歸らん

この「插花吟」は、陳衍（一八五六―一九三七）の編纂した『宋詩精華錄』^⑪（卷二）にも「安樂窩」詩とあわせて選録されている。そして曹中孚が『宋詩精華錄』「前言」（一

五頁）において、「插花吟」即嚴羽所說的邵康節體、它帶有民歌小調的形式」（「插花吟」はすなわち嚴羽（滄浪詩話）にいうところの邵康節體であり、民歌の小調形式を帯びている）云々と指摘しているように、「插花吟」にみられるような詩風が、邵雍の詩における典型的な一面であって、道學者流の形而上的世界をうたった作品ばかりが邵雍の文學的宇宙である、というわけでは決していないのである。

三 朱敦儒「念奴嬌」と邵雍

前節において、朱敦儒の名作「鷓鴣天 西都の作」を取りあげ、五點にわたって邵雍の詩との關連性を述べ、この作品に邵雍の詩の影響が認められることを指摘した。しかし、朱敦儒の詞にあらわれた邵雍は、前半生の「鷓鴣天 西都の作」一首にとどまらない。朱敦儒の詞には、彼の生涯にわたって邵雍があらわれる。「晚期詞作（一二四六―一五九九年）」の「一、被強起再仕前（一二四六―一五九九年）」の作、『朱敦儒集』（四四頁）では「朱敦儒晚年致仕以後的作品」とされる「鵬海風波」で始まる「滿庭芳」（二六一

頁)、おなじく「一、被強起再仕前」に屬する「一個小園兒」で始まる「感皇恩」(一六五頁)、さらに「晚期詞作」の「二、再度出仕、再度歸隱至死(一一五五—一二五九年正月)」に屬する「堪笑一場顛倒夢」で始まる「臨江仙」(二二三頁)など、後半生の詞にも邵雍の影響がみとめられる作品がある。ここには「晚期詞作」の「二、再度出仕、再度歸隱至死(一二五五—一二五九年正月)」に屬するところの朱敦儒最晩年の作品「念奴嬌」(二四六頁)を紹介しよう。次のようにうたわれている。

老來可喜	老い來たりて喜ぶ可きは
是歷遍人間	是れ人間を歷遍し
諳知物外	物外を諳知すればなり
看透虛空	虛空を看透し
將恨海愁山	恨みの海 愁いの山を將つて
一時按碎	一時に按碎す
免被花迷	花に迷わさるるを免れ
不爲酒困	酒の困 <small>みだ</small> すところと爲らず
到處惺惺地	到處 惺惺地なり

飽來覓睡 飽き來たれば睡りを覓め
睡起逢場作戲 睡りより起くれば 場に逢いて戲を作す

(以上、前関)

休說古往今來 古往今來を説くを休めん

乃翁心裏 乃翁の心裏

沒計許多般事 許多般おおくの事を計るな沒し

也不虧仙 也た仙を虧もめず

不佞佛 佛に佞おもねらず

不學棲棲孔子 棲棲たる孔子を學ばず

懶共賢爭 賢と共に争うに懶く

從教他笑 他まの笑うに從教さん

如此只如此 此くのの如く 只だ此くのの如し

雜劇打了 雜劇 打はね了れば

戲衫脫與呆的 戲衫はを脱ぎて 呆ば的に與けえん

(以上、後関)

説明が前後するが、後関第2句の「乃翁」は「作者自らを謂う」(「樵歌」の説。四七頁)。前関第10句「飽來覓睡」

および最後の一句「逢場作戲」は、ともに『景德傳燈錄』（卷六）に出るもので、「逢場作戲」は、入矢義高監修古賀英彦編著『禪語辭典』（六五頁下段）によれば、「その場その場を遊戲三昧でこなすことをいう」。朱詞の場合、後関の最後の二句「雜劇 打ねれば、戲衫を脱ぎて 呆的に與えん」に呼應し、人生を虚構にすぎない一場の「雜劇」（芝居）にたとえて表現されている（『雜劇』の句も、『五燈會元』卷十九にもとづく）。このように禪語を援用してうたわれる「念奴嬌」は、邵雍の詩には絶えてみられない投げやりな氣分に覆われ、救いようのない虚脱感に陥っている。しかし、無視できないのは、後関第4・5句「也た仙を斬めず、佛に佞らず」である。『樵歌注』（二四六頁）は、『晉書』卷七十七「何充傳」の「二郗詡於道、二何佞於佛」（二郗は道に諂い、二何は佛に佞る）を、『樵歌』は、李商隱「詠懷、祕閣の舊僚に寄す二十六韻」（『玉谿生詩箋注』卷四）の「事神徒惕慮、佞佛愧虚辭」（神に事えて徒らに惕慮し、佛に佞りて虚辭を愧ず）を、それぞれ指摘するけれども、邵雍が自畫像をうたった「安樂吟」^⑬（卷十四）の一聯

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍（森）

不佞禪伯 禪伯（佛のこと）に佞らず
不諂方士 方士（仙術の士）に諂わず

が直接に影響しているのではないか。また後関第6句「棲棲たる孔子を學ばず」は、『論語』「憲問」の「微生畝 孔子に謂いて曰わく、丘 何爲れぞ棲棲たる者ぞ。乃ち佞を爲すこと無からんや。孔子對えて曰わく、敢えて佞を爲すにはあらざるなり。固を疾むなり」にもとづき、微生畝（隱者）の立場からなされた孔子批判の表現である。けれども『論語』と朱詞の間には、邵雍「名利吟」（卷三）

名利到頭非樂事 名利は到頭樂事に非ず
風波終久少安流 風波は終久に安流すること少なかり
稍隣美譽無多取 稍や美譽に隣すれば 多く取る無かれ

纔近清歡與賸求 纔かに清歡に近づけば 與に賸く求めよ
美譽既多須有患 美譽 既に多ければ 須らく患い有るべし
清歡雖賸且無憂 清歡 賸しと雖も 且つ憂い無し

滔滔天下嘗知否 滔滔たる天下 嘗て知るや否や

覆轍相尋卒未休 覆轍 相尋いで 卒に未だ休まざるを

るを

が、介在しているのではないか。「滔滔」は、もともと隱者の長沮と桀溺が孔子の處世を批判するさいに放った言葉であり（『論語』「微子」）、「滔滔」の一聯は、ここでは詳述しないが、孔子の處世にたいする邵雍の批判だからである。大事なのは、孔子に對する絶對的權威が確立する過程において、邵雍は孔子を批判していた、という點である。

なお、黃文吉氏は、『宋南渡詞人』（一一九頁、臺灣學生書局 中華民國七十四年五月）において、「也不蘄仙、不佞佛、不學棲棲孔子」に對し、

從這些話他似乎非道・非佛・非儒、其實他一生全部的思想是融合儒釋道的。在年輕的第一階段、他那種追求個人自由・不肯出仕的人生態度、已經隱約有道家的思想在裏面了。（これらの言葉から彼は道教でもなく、佛教でもなく、儒教でもないようにみえるが、實際には彼の一生のすべての思想は、儒釋道の融合である。年若い第一段階に

において、彼のあの個人の自由の追求・出仕しようとしなない人
生態度には、すでに内部に道家の思想が見え隠れする）

と述べる。筆者は、朱敦儒の思想における道家的要素を否定するわけではないが、この文の「道家の思想」を「邵雍の思想」に置き換えれば、黃氏の見解に完全に同意する。もし道家との関連でいうならば、邵雍には濃厚な道家思想があり、朱敦儒は邵雍のこの方面の影響を受けているのである。

朱敦儒の作品全體にただよう情調は、邵雍の作品のたえずまいとかなり異質なものであることを認めなければなら
ないけれども、彼の作品には、邵雍の姿がちらほら見え隠れしていることもまた否定できない。朱敦儒はたしかに邵雍の核心的思想に觸れ、感化されている。しかし、管見によるかぎり、これまで邵雍と朱敦儒の關係が指摘されたことはほとんどなかった。たとえば牛衛東氏の「二〇世紀以來朱敦儒研究回顧」^⑮は、標題に示されるとおり、二〇世紀における朱敦儒研究の大まかな一覽であるが、これに取りあげられた五十數點の資料の中で、邵雍との關係に觸れた

文獻が指摘されることは、後述する胡適（一八九一—一九六二）のものを除けば、皆無である。これはおそらく、牛衡東氏が取りあげた朱敦儒關係の文獻資料に邵雍に觸れたものが、胡適のものを除いて、まったくないということであろう。牛氏自身も兩人の關係を意識していないようだ。

また牛衡東氏には取りあげられていない張清玲氏の大著『朱敦儒《樵歌》析論』^⑩（二四頁）は、「這類作品繼承中國文人的隱逸思想、創新地用「詞」這種文學樣式表現出來、既與屈原・陶淵明之作有一脈相承的系統、也是隱逸詞的鼻祖與開路先鋒」（この種の作品は、中國文人の隱逸思想を繼承して、新たに「詞」という文學樣式で表現し、屈原・陶淵明の作と一脈通じる系列をもち、また隱逸詞の鼻祖であり先導者でもある）と述べ、邵雍に言及することはない。さらに同書の「第四章《樵歌》形式分析 第三節 修辭方法 一、用典（一）語典 1、襲用或增刪前人成句」（七一頁）、および「2、點化前人作品」（七二・七三頁）において、邵雍の作品は引用されていない。

以上の事實は、次のようなことに原因がある。第一に、

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍（森）

詞の作者である朱敦儒の研究者は、いわゆる新儒學者としての邵雍に關心がなく、逆に邵雍の研究者は朱敦儒に關心がない、つまり儒學と文學とを同時に關心をもつことが稀であること、第二に、朱敦儒も邵雍も、從來、頻繁に取りあげられることがなく、研究者の興味をあまりそそらない人物であること、第三に、第二と關連して、邵雍の場合、彼が隱者という正統からはずれた人物であるために敬遠されがちであること、そして第四に、先ほど引用した張清玲氏の『朱敦儒《樵歌》析論』にせめられるように、邵雍が朱敦儒の作品の中に、讀者の誰の眼にも一讀して明らかにわかるような形となつて、現れているわけではないことなど。要するに邵雍の存在など、始めから問題にならないのである。なお蛇足ながら、第四の點については、おそらく邵雍が新法に反對の立場の人物であることを考慮した、朱敦儒の意圖的な作意によるものと思われる。

しかし、「德は孤ならず、必ず隣あり」、果たして、邵雍と朱敦儒との間にある微妙な關係を感じ取っているのは、筆者一人ではない。胡適は、『胡適選註の詞選』^⑪の朱敦儒

「解説」(一四〇頁)において、次のように記している。

我們看他的詞、可分三個時期。(中略)第三是他晚年閑居的時期。這時候、他已很老了、飽經世故、變成了一個樂天自適的詞人。(中略)這一個時期的詞、有他獨到的意境、獨到的技術。詞中之有《樵歌》、很像詩中之有《擊壤集》(邵雍的詩集)。但以文學的價值而論、朱敦儒遠勝邵雍了。將他比陶潛、或更確切罷。(われわれは彼の詞を見ると、三つの時期に分けることができる。(中略)第三は晩年の閑居の時期である。このとき、彼はすでに年老いて、世の中の辛苦を味わいつくし、樂天自適の詞人に變わっていた。(中略)この時期の詞には彼獨特の境地、彼獨特の技法がある。詞中に『樵歌』があるのは、詩中に『擊壤集』(邵雍の詩集)があるのによく似ている。ただ、文學的價值を論ずれば、朱敦儒は邵雍にはるかに優れている。彼を陶潛に比擬すれば、あるいはいっそう適切かもしれない。)

アンシクロペディストとしての慧眼なのであろうか、あるいは個人的嗜好の結果によるのであろうか、胡適は、

詞中の『樵歌』は詩中の『擊壤集』に類似している、という言い回しで明瞭ではないけれども、朱敦儒と邵雍との關係に氣づいていたのではあるまいか。少なくとも兩者の類似性は感じていた。ただ、胡適は兩者の關係について、より深く追求することがなく、彼の關心が陶淵明に移って、そこで終わっているのは、まことに遺憾なことである。

四 朱敦儒と邵雍

朱敦儒は、邵雍の死(一〇七七年)の後、數年たった一〇八一年に生まれた。したがって彼は、邵雍に時代的に近い人物である。このような朱敦儒が「鷓鴣天 西都の作」にみられるごとき詞をうたったのは、隱者として同じく洛陽に暮らしていた邵雍の人生や文學に傾倒し、あこがれたからであることは、明白である。しかし、なぜ朱敦儒は邵雍にあこがれ、傾倒したのだろうか。

事の詳細は、蕭慶偉著『北宋新舊黨爭與文學』(人民文學出版社 二〇〇一年六月)の「第二章 北宋黨爭與北宋文禍」にゆずるが、元豐二年(一〇七九)、新法に反對した蘇

軾（一〇三六―一一〇一）の身に起こった烏臺詩案、また元祐四年（一一〇八）朱敦儒九歳、新法側の蔡確（？―一〇九〇？）に加えられた車蓋亭詩案が政界・文藝界を騒がせ、さらに徽宗の崇寧元年（一一二一）朱敦儒二十二歳、司馬光（一一〇一―一一八六）や蘇軾や程頤（一一〇三―一一〇七）など舊法黨に連なる人物百二十名の名前を刻した「元祐姦黨碑」^②が、都の太學の端禮門外におかれるという衝撃的事件が起こった。このような一連の政治事件に激しい黨争に、王安石の死後も、新法黨と舊法黨との間に激しい黨争が續いて、泥沼化の様相を呈していた。ちなみに新舊の黨首の王安石と司馬光が亡くなったのは、ともに元祐元年（一一〇八）、朱敦儒が六歳のときである。このような複雑で危うい政治的環境を目の当たりにして、そこから逃れ、政治と無縁の處世を考えようとした知識人、ことに洛陽に住む知識人の腦裏に、政治に直接かわることなく、隱者の人生を幸福に送った邵雍が、もっとも身近な手本として浮かんだのは、ごく自然なことではあるまいか。邵雍の子息・伯溫（一一〇五―一一三四）著『聞見錄』（卷二十）に、

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍（森）

彼と同時代の陳恬（一〇五八―一一三一）なる人物について、次のような記事がある。

康節先公過士友家書枕、見其枕屏小兒迷藏。以詩題其上云、遂令高臥人、欹枕看兒戲。蓋熙寧間也。陳恬云、擊壤集不載。」（康節（邵雍）の諡、先公士友の家に過ぎりて書枕するに、その枕屏に小兒の迷藏（かくれんぼ）するを見たり。詩を以てその上に題して云わく、遂に高臥の人をして、枕を欹てて兒戲を看しむ、と。けだし熙寧（一一〇六―一一〇七）の間なり。陳恬云わく、擊壤集に載せず、と。）

さらに『宋詩紀事』（卷三十七）「陳恬」に次のように記されている。

字叔易。堯叟裔孫。居陽翟澗上村、無仕宦意。崇觀間、朝廷召之、郡主勸駕、不得已而起。建炎初、召赴行在直祕閣。有澗上丈人集。（字は叔易。堯叟の裔孫なり。陽翟（河南省禹縣、洛陽のおよそ東南二〇キロメートル）の澗上村に居り、仕宦の意なし。崇（寧）（大）觀の間（一一〇二―一一一〇）、朝廷これを召すに、郡主の勸駕すれば、已むを得ずして起つ。建炎（一一二七―一一三〇）初、召さ

れて行在の直祕閣に赴く。潤上丈人集（現在逸す）有り。）

このように、陳恬は邵雍の文學に親しんでおり、本來「仕宦の意」がなく、仕宦は「已むを得」ないものであった。ここで指摘しなければならないのは、このような陳恬にみられる政治に對する一種の拒否反應は、時代的な雰圍氣ではなかったか、ということである。李處權（？——五五）なる人物がいる。彼に『松庵集』という詩集があり、冒頭に付載されている從弟・李處全による「原序」に、

在政宣時、與陳叔易・朱希眞皆以詩名。（政和・宣和（一一一一——一二二五）の時（つまり北宋時代）に在りて、

陳叔易（恬）・朱希眞（敦儒）と皆な詩を以つて名あり。）

と記されている。ところで李處權は、「夢歸賦」（『松庵集』

卷二）の「引」において、「予れは洛（陽）の人なり」とみずから表白しているから、彼も洛陽の人である。彼はまた^②

「彭表臣・才臣に贈る」詩（卷二）の中で

我昔當少年 我れ昔 少年に當り

擺落謝紛糾 擺落して 紛糾を謝す

とうたっている。「紛糾」が具體的に何をさすのか不明で

あるが、おそらく新舊兩黨間のごたごたにちががなく、青年時代には官界入りを敬遠したということであろう。さらに「士特・似表を招く」詩（卷一。士特は翁挺の、似表は李彌正の字）にいたっては、次のような作品である。

山雲向晚留

山雲は晚に向かいて留まり

山雨凌晨濯

山雨は曉を凌いで濯う

花明紅欲墜

花は明るく 紅は墜ちんと欲し

松淨翠可握

松は淨く 翠は握る可し

未覺人意寬

未だ覺らず 人意の寬きを

獨喜鳥聲樂

獨り喜ぶ 鳥聲の樂しきを

平生麋鹿性

平生 麋鹿の性

避地諧丘壑

地を避け 丘壑に諧う

復接翁季友

復た翁季友に接し

詩文贖酬酢

詩文 贖つさえ酬酢す

蘿門邃宜步

蘿門 邃くして歩むに宜しく

窪樽深可酌

窪樽 深くして酌む可し

不聞杖屨過

杖屨の過ぐるを聞かざるは

無乃厭磽确

乃ち磽确を厭う無からんや

願承名理談 願わくは 名理の談を承け

煮茗破昏濁 茗を煮て 昏濁を破らんことを

全體的にうたわれているのは超俗的世界であり、とりわけ「未だ覺らず 人意の寛きを、獨り喜ぶ 鳥聲の樂しきを。平生 麋鹿の性、地を避け 丘壑に諧う」と表明されているところは、意味深長である。李處權も本来「仕宦の意」がなかったかもしれないのである。そのうえ『崧庵集』には、「陳叔易に次韻す三首」（卷二）、「朱希真に寄す」（卷四）など、李處權が陳恬や朱敦儒と交際していた跡がうかがわれる作品がある。もともと、李處權が『擊壤集』を愛讀していたのかどうか、彼と邵雍との関わりはいかなるものであったのか、これらの事を『樵歌』のように、

『崧庵集』中にさぐることは、『崧庵集』を一讀したかぎりで言えば、困難であるようだ。けれども、すでに引用したとおり、李處權が陳恬や朱敦儒とともに、北宋時代に、おそらく洛陽を據點に「詩を以て名」のある人物であった、と記されている背景には、彼らの間に共通する思想的傾向、つまり邵雍のような隱者の處世に對する憧憬があつ

たことを暗示しているのではあるまいか。李處權はたしかに「爲に言わん 陶靖節、吾れも亦た吾が廬を愛すと」（「隱居に題す」卷四）とうたっている。しかし、これは、隱者といえは陶淵明という連想が常識的パターンとなつていたからであつて、現實的にはむしろこの時代特有の現象として、彼らにとつて身近な存在である邵雍とのかかわりを問題にすべきではあるまいか。「我れ昔 少年に當り、擺落して 紛糾を謝す」とうたい、陳恬や朱敦儒と交流のあつた李處權が、たとえ彼の作品の中に邵雍の痕跡を見出しがたいとしても、邵雍にまったく無關心であつたとは到底かんがえられない。そしておそらく李處權や陳恬の例は、氷山の一角にすぎないであらう。

錢鍾書氏は『宋詩選注』（二四七頁 人民文學出版社 一九七九第三次印刷）「陳與義」において、「身歷離亂の宋人對杜甫發生了一种心心相印的新關係」（戰亂による離散を實際に體驗した宋人は杜甫に對して、一種無言の理解という新しい關係が生まれた）と述べる。これほど大きなインパクトはないとしても、これに類似した共鳴現象が、小規模に朱敦儒

たちと邵雍との間にも起こったのではあるまいか。しかも朱敦儒の場合、彼は舊法黨の人脈に深くつながっていたようだ。²²かくして、洛陽において隱逸の人として、氣のおもむくままに詩を作り、酒にほどよく酔いながら、²³歡喜の人生をまっとうした邵雍こそは、朱敦儒にとって目標とする理想的な先輩であった、鄧子勉氏が指摘されるように、かりに亡國の前に汴京において一度仕官していた経験があるとしても。朱敦儒は、「晚期詞作」の「二、再度出仕、再度歸隱至死（一一五五—一一五九年正月）」に屬する「好事近」（二四一頁）において、次のようにうたっている。

我不是神仙

我れは是れ神仙ならざれば

不會煉丹燒藥

丹を煉り 藥を燒くを會せず

只是愛閑耽酒

只だ是れ閑を愛し 酒に耽り

畏浮名拘縛

浮名に拘縛せらるるを畏るるのみ

（以上、前闕）

種成桃李一園花

種え成す 桃李一園の花

眞處怕人覺

眞處 人の覺るを怕る

受用現前活計

現前の活計を受用し

且行歌行樂

且くは行歌し 行樂せん

（以上、後闕）

後闕第2句の「眞處」について、『樵歌注』は「自己的内心世界」と解釋する。その意味は、「桃李一園の花」は、朱敦儒にとってひそやかなる「眞處」であるゆえに、「桃李一園の花」を愛する眞情を人に「覺」られ、ために汚されることを「怕」れる、ということであろう。なお、「眞處」といえば、邵雍の「閑中吟・その二」（卷十七）に

閑中氣味眞

閑中 氣味は眞なり

眞處是天民

眞處は是れ天民

富有林泉樂

富みて林泉の樂しみ有り

清無市井塵

清くして市井の塵無し

爛遊千聖奧

千聖の奧に爛遊し

醉擁萬花春

萬花の春を醉擁す

莫作傷心事

傷心の事を作す莫かれ

傷心愁殺人

傷心は人を愁殺す

とうたわれている。「天民」は『孟子』（「萬章上」「萬章下」「盡心上」）にある言葉。「章句」（「萬章上」「萬章下」と「盡

心上」)によつてニュアンスに違いがあるようだが、邵雍は「天民」を、おそらく文字どおり「天が生んだ民」という意味に理解し、天にのつとつて自然に生きる人の意味で使っている。桃李は自然の物、つまり天が生んだものであるという點において、邵雍の「眞處」と朱敦儒の「眞處」とは、言葉が同一のみならず、思想的にも一脈通じるところがある。要するに筆者のいいたいのは、朱敦儒の右の詞は、朱敦儒自身の願望の表白であると同時に、邵雍に對する朱敦儒の共感の無意識の表出である、ということだ。たとえれば微風にも過敏に反應する繊細多感な朱敦儒に對して、暴風に對しても平然としている豪放磊落の邵雍という

ような人間性の反映なのであろうか、兩者の文學には明暗の對照的ともいうべき相違があるけれども、邵雍の存在を視野に入れることによって、「好事近」はいっそう深く詞意を汲みとることができるのではあるまいか。邵雍は、「神仙」や「煉丹燒藥」(外丹)を否定していたのみならず、^②「閑を愛し」(「秋霽れ石閣に登る」卷九)、「浮名」(「旅中歲除」卷二)に超然とし、「桃李」(「共城十吟・小序」『集外

詩」)に圍まれ、「行樂」(「秋遊六首・その四」卷二)の生活を「受用」(享受)しながら、隱者の人生をまっとうした人物であるからだ。ただ、朱敦儒の場合、時代の狂濤は、隱者の道の完遂を許さなかったのである。^③

五 結 語

南宋・高宗紹興十年、金・熙宗天眷三年(一一四〇)に山東省歷城縣に生まれ、金國との徹底抗戦に全生命を賭した辛棄疾(一一四〇―一二〇七)や、元の侵攻(一二五七年)という現實に直面した劉克莊(一一八七―一二六九)、彼らのごときは、「洞仙歌 丁卯八月病中作」(鄧廣銘箋注『稼軒詞編年箋注』五六〇・五六二頁)と題する辭世の詞の後闕最後の三句、および景定改元の年(一二六〇年)の作「書事十首・その一」(『後村先生大全集』卷三十二)と題する七言律詩の最後の一聯において、それぞれ

深自覺 昨非今是 深く自ら覺る 昨は非にして

今の是なるを

羨安樂窩中泰和湯 羨む 安樂窩中の泰和湯

更劇飲無過 半醺而已 更たい劇飲すとも過ぐる無く

半醺なる而已を

吾評子美飢寒態 吾れは評す 子美 飢寒の態

不似堯夫快活身 堯夫 快活の身に似しかずと

と、はつきり邵雍に對する羨望を表明してうたっている。

「安樂窩」は邵雍の住宅の號、「泰和湯」は酒、佛教に對抗して般若湯をもじって邵雍が命名した。「快活」は邵雍の生活信條を示す言葉。²⁶ 筆者は拙稿「邵雍の『洗竹』詩をめぐって——邵雍の白居易および陳憲章との關係——」²⁷に

おいて、「道學者である邵雍は詩人でもあるけれど、彼とその後の人たちとの關係は、道學の影響を強く受け、邵雍に強い關心を持っていた元の劉因や明の唐順之などのような人物を除外すれば、一般的にはきわめて稀薄である」と述べた。けれども、邵雍に傾倒した文化人たちの系譜の中に、朱敦儒をも取り入れることができるという事實は、注意されてよい。宋代文化史、あるいは廣く中國文化史において、邵雍の生涯六十七年の間、中國本土が侵略される

ことがなかったという意味で太平であった時代に、隱者の人生を貫き通すことができた邵雍という人物の存在意義が、あらためて浮かびあがってくるからである。「(宣和三年二月) 癸巳、淮南の盜・宋江、淮陽軍を犯す。また京東・河北を犯し、楚・海州に入る」(『東都事略』卷十一「本紀」)。「時に宋江、京東を寇す。(侯) 蒙、上書し制賊の計を陳べて曰わく、宋江、三十六人を以って、河朔・京東に横行す。官軍數萬敢えて抗する者なし。その材は必ず人に過ぎん。過ちを赦して招降し、方臘を討ちて以って自贖せしむるにしかず」(『同書』卷一百三「侯蒙傳」)。「五月丙申、宋江擒に就く」(『同書』卷十一「本紀」)。右に引用した當時の朝廷の高官たちを震えあがらせた宋江ら三十六人は、いうまでもなく小説『水滸傳』に活躍する呼保義宋江たち三十六人である。事は宣和三年(一一二二)、北宋滅亡の六年前である。この『水滸傳』の「引首」に邵雍の「觀盛化吟」(卷十五、『擊壤集』收録の作品と一部異同がある)と題する詩が引用され、次のようにうたわれている。

紛紛五代亂離間 紛紛たる五代 亂離の間

一旦雲開復見天 一旦 雲開け 復た天を見る

草木百年新雨露 草木 百年 雨露新たに

車書萬里舊江山 車書 萬里 江山舊りたり

尋常巷陌陳羅綺 尋常の巷陌 羅綺を陳ね

幾處樓臺奏管弦 幾處の樓臺 管弦を奏す

人樂太平無事日 人は樂しむ 太平無事の日

鶯花無限日高眠 鶯花 限り無く 日高くして眠る

「人は樂しむ 太平無事の日、鶯花 限り無く 日高く

して眠る」、右の詩を愛唱したのは、『水滸傳』の作者や多

くの名も知られない讀者にかざられるものではなかったで

あろう。邵雍が隱者の人生を貴き、最後まで樂しむことが

できたのは、朝廷からの二度の招聘を拒絶した彼自身の堅

固な意志によるとともに、彼の時代が太平であったことと

切り離すことができないのである。

註

① 鄧子勉 校注『樵歌』（宋詞別集叢刊 上海古籍出版社

一九九八年七月）「前言」（一頁）によれば、「朱敦儒在南渡
前似乎曾一度出仕。其時當在宋徽宗宣和年間、至少五年、年

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍（森）

四十三歳左右、後因宣和亂政而歸隱」。また朱敦儒は南宋時代に出仕しており、そのうち紹興二十五年（一一五五）七十五歳のとき、秦檜に招かれて鴻臚少卿となったことは、朱敦儒一生の悔恨事とされる（同書二頁）。

② 陶尔夫 劉敬圻 著『南宋詞史』（黑龍江人民出版社 一九九二年二月）の「第二章 第二節 高手雲集の南渡詞人之林」（三四頁以下）参照。

③ 洪永鏗 編著『朱敦儒集』「序」四頁（浙江大學出版社二〇〇五年三月）。このような評價は、宋・汪莘（一一五五？）の「方壺詩餘・自序」（『彊村叢書 第六冊』所收）に述べられている東坡・朱希真・辛稼軒三變説にもとづく。

④ 『彊村叢書』所收『樵歌』には二四五頁、『全宋詞』には二四六頁（『念奴嬌』一首）、『四印齋所刻詞』所收『樵歌』には二四七頁（『孤鸞』一首）、鄧子勉 校注『樵歌』には二四九頁（『絳都春』・『秋霽』二首）、それぞれ収録されている。

⑤ 沈文凡、彭飛著「南渡詞人朱敦儒悲劇心理及其藝術表徵」（『延邊大學學報（社會科學版） 第四〇卷第二期』二〇〇七年四月）に「他（朱敦儒）的詞繼承和發展了蘇軾抒情自我化的詞風」（七七頁左）云々と記され、また顧友澤氏に「試論道教對朱敦儒詞的影響」（『內蒙古社會科學（漢文版） 第二四卷第五期』二〇〇三年九月）と題する論文、劉曉珍氏に「『樵歌』與禪」（『廣西社會科學 二一〇〇四年第六期』）と題する論文がある。

- ⑥ 拙稿「邵雍の詩に現れた白居易(後)」三八頁(『大谷女子大學紀要 第三九號』所收 二〇〇五年二月)。
- ⑦ 司馬光「酬張二十五秀才南園遣意」詩(卷十三)の題下の注に「景昱字明叔」とある。人物の詳細は不明。
- ⑧ 薛礪若著『宋詞通論』(上海書店 一九八五年六月 開明書店一九四九年三版復印本)は、朱敦儒の「詞曠逸俊邁、與李太白詩情爲近」(二二三頁)と述べ、さらに「鷓鴣天 西都の作」を引用して、「這種狂逸の心懷與風調、不獨在詞中爲絕無僅有、即在中國全部詩歌中、只有太白能有此種境界」(二一五頁)と評する。張而今氏も、「朱敦儒詞縱觀」(『文學遺產 一九九七 第三期』所收)において、「而那種傲視王侯的作風、與李白『安能摧眉折腰事權貴』的精神一脈相通」(四四頁)と指摘する。
- ⑨ 顧友澤氏は、「試論道教對朱敦儒詞的影響」において、「鷓鴣天 西都の作」を引用した後、「詞人以神仙般的情懷看待着世間的繁華。他寧願放浪于山水之間、逍遙自在、也不願爲功名利祿所羈絆。其思考問題的方式無疑有模倣神仙的迹象」(八三頁左)と述べ、「鷓鴣天 西都の作」を神仙思想と結びつけて論じている。
- ⑩ 『千家詩』は、陳緒萬『千家詩全譯(修訂本)』(語文出版社 一九九五年二月)による。なお蛇足ながら、陳緒萬氏は、邵詩の第一聯を「美人頭插着花枝、映入宴上的酒卮、杯中的酒又映出美人容貌宛如花枝」(一一四頁)と譯出されたが、冒頭の「美人」は作者自身の誤り、また後半の句を「美人容貌宛如花枝」のように「花枝」を「美人」の比喩に解釋されているが、比喩に解釋してはいけない。したがって第7句の譯文「酒波中、美人的倩影不時晃漾閃現」の「美人」も作者自身でなければならない。
- ⑪ 陳衍評點 曹中學校注『宋詩精華錄』(巴蜀書社 一九九二年三月)。
- ⑫ 『樵歌』(四六頁)は「本篇當作於紹興二十五年十月後」、「朱敦儒集」(二七頁)は「詞人晚年的作品」とする。
- ⑬ この詩の詳細は、拙稿「邵雍の詩に現れた白居易(前)」(『大谷女子大學紀要 第三八號』所收 二〇〇四年二月)の「四 快活の人」を参照。
- ⑭ 拙稿『舊歡』と『清歡』——五代・北宋文學の一斷面——(『大阪大谷大學紀要 第四四號』所收 二〇一〇年二月)七頁以下を参照。
- ⑮ 『河南科技大學學報(社會科學版) 第二五卷第六期』(二〇〇七年十二月)。
- ⑯ 『國立屏東教育大學中國語文學系碩士論文』中華民國九十六年七月。
- ⑰ 『胡適作品集三〇』所收(遠流出版 一九八六年)。
- ⑱ 竹內好「胡適とデューイ」(『竹內好全集 第五卷』所收 筑摩書房 一九八一年)。
- ⑲ 『詞選』には朱敦儒の作品は、辛棄疾の四十六首について、

二番目に多い三十首が収録されている。ちなみに朱敦儒の次は、陸游の二十一首、蘇軾の二十首である。胡適の朱敦儒に對する嗜好が推察される。

⑳ 『宋史』卷十九「徽宗一」。

㉑ 李處權の出身地をめぐっては、連國義著「南渡詩人李處權及其詩歌初探」（『新鄉師範高等專科學校學報 第二〇卷第三期』二〇〇六年五月）を參照。

㉒ 陳麗娟氏の「朱敦儒三召不起の緣由探蹟」（『蘭臺世界』二〇〇七年二期）に、「他（朱敦儒）的父親朱勃立場怎樣、（中略）從朱敦儒家的社會關係及交往的人來看，就可知他家和元祐黨人的關係頗爲密接」、および「朱敦儒交往的大多數是元祐黨人及其後代」（四八頁左）と指摘されている。

㉓ 「安樂窩中吟・その十一」（卷十）において「飲酒莫教成酩酊、賞花慎勿至離披」とうたっているように、酒はほどほどのところでやめておく、というのが邵雍のモットーであった。

㉔ 拙稿「邵雍の詩にあらわれた養生術——『二十五日、韻に依り左藏吳傳正寺丞に贈らるるに和す』詩を中心に——」（『中國文學報 第七十一冊』平成十八年四月）を參照。

㉕ 劉克莊「詩話・後集」（『後村先生大全集』卷一百七十六）に、次のような逸話が記されている。「朱希真舊有詞云、詩萬首、辭千場。幾曾着眼看侯王。王京有路終須去、且插梅花住落（洛）陽。後召用、好事者改云、如今縱把梅花插、未必侯王着眼看。（中略）凡人晚出皆誤、右軍至於誓墓、僅能自

朱敦儒の詞にあらわれた邵雍（森）

全」。

㉖ 本稿注⑬を參照。

㉗ 『文藝論叢 第七一號』（四五頁下段 大谷大學文藝學會 二〇〇八年九月）所收。